

研究ノート

## 保育実践力向上を目指した授業実践について

～「領域『環境』の指導法Ⅰ」における取組～

本 村 弥 寿 子

About class practice aimed at improving childcare practical skills

～Initiatives in “Teaching Methods for the Environment I”～

Yasuko MOTOMURA

キーワード：領域「環境」 自然環境 自然とのかかわり 自然環境マップ

### 1 はじめに

保育において「自然」との関りは大切である。幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、「幼児期において自然の持つ意味は大きく」と、自然とのかかわりの重要性が明記されている。さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中にも、「自然との関わり・生命尊重」が“10の姿”の一つとして挙げられている。このように、「自然」との関わりは我が国の保育において大切な要素となっている。

保育において、「自然」との関わりを大切に扱うには、保育者自身が「自然」に興味・関心を持つことであったり積極的に関わったりすることが求められる。「自然」という言葉の中には、動植物、気象や天体、また、石や砂・泥・水など多くの物質や事象が含まれる。そのため、一言で自然への興味・関心等の有無は言い切れないが、保育現場では、身近な動植物を念頭に「自然」という言葉を使用することがほとんどである。そのため、身近な動植物への興味・関心を持ち続けることが保育者には必要であると考えられる。

しかし、現代社会は、都市化により「自然」に積極的に触れる機会が減少している。そして、その傾向は、本学幼児教育学科で保育者を目指す学

生も例外ではないと思われる。例えば、気候が良い日に窓を開けて授業を行っているところ、昆虫が教室に入ってくる時がある。そのような時、大概の学生は悲鳴を上げたり席を立ったりして大騒ぎとなり、授業はいったん中止となる。クモ、ムカデなどの害虫の類の場合は分かるが、近年、アゲハチョウやシオカラトンボなど街中でも見かけられるような、そして、幼少期に触れ合ったことのあるような昆虫に対しても嫌悪感を示す学生が増えている。また、保育現場でも歌われる「たきび」の2番の歌詞に登場する「山茶花」が、どのような花なのか知らないという学生がほとんどであるという。本学にも、学生がよく通る場所に山茶花が植えられている。冬季には濃いピンクの花をたくさんつけ、色味の乏しい冬の中庭でかなり目立っている。しかし、それにもかかわらず、学生のほとんどは、山茶花を見たことがない、知らないと言うのだ。このような学生の姿から、身近な自然に対する学生の興味・関心が如何に薄いかが理解できる。

幼稚園教育要領等の領域「環境」では、[内容の取扱い]で、以下のように記されている。

幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容  
環境 3 内容の取扱い

(2) 幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接接触する体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。

子どもは、自然と関わり豊かな体験を積み重ねることで情緒が安定し、生きる上で必要な様々な力を培っていく。そのために、保育者は保育を工夫する必要があるというのだ。幼稚園教育要領解説には、「教師は自らが感性を豊かに保ち、自然とその変化のすばらしさに感動することや幼児がちょっとした折に示すささやかな自然への関わりに共鳴していくことが大切」であること、「さらに、例えば、どのような樹木を植えておくかといった園内の環境から保育室内でどのような生き物を育てるかといった環境の工夫が必要」と明記してある。この記述からも、保育者は「自然」に対して興味・関心を持って積極的に関わる姿勢が重要であると理解される。

そこで、本稿では、「領域『環境』の指導法Ⅰ」の取り組みを見直し、身近な「自然」への学生の興味・関心を高める授業内容や方法について検証する。

## 2 領域「環境」の指導法Ⅰについて

### 2.1 授業方法及び内容

科目名：領域「環境」の指導法Ⅰ

単位数：1単位

受講対象：幼児教育学科1年生

開講時期：1年次後期

本科目は、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得するための必修科目である。保育内容「環境」のねらいや内容を踏まえた保育実践について学び、保育を構想する方法を身に付けることを目指している。本科目を履修するためには、1年次前期の「子どもと環境」（講義1単位）を履修することが必要である。令和6年度は、1年生63名が受講した。授業は63名を2クラスに分け、週に1回、

90分ずつの授業を8回行った。

授業計画は表1のとおりである。第1回では「子どもと環境」で学んだ内容を振り返り、領域「環境」の視点から保育で大切にしていることを押さえた。そして、第2回から第7回までは、子どもの身近な環境との関りを豊かにする保育実践について、教科書や授業者のエピソードを基に理解を進められるようにした。前述したように、保育における「自然」との関わりは特に重要視されているため、2週にわたって授業を展開した。

表1 領域「環境」の指導法Ⅰ 授業計画

1	領域「環境」のねらい及び内容について
2	乳児保育における「環境」との関わり
3	モノとの関りを支える保育の展開
4	自然との関りを支える保育の展開①
5	自然との関りを支える保育の展開②
6	社会との関りを支える保育の展開
7	領域「環境」と小学校教育のつながり
8	授業の振り返りと模擬保育の準備

本稿は、本科目の第4回、第5回に行った“自然との関わりを支える保育の展開”の授業内容について振り返りを行うこととする。

### 2.2 授業の実際

#### 2.2.1 第4回の授業について

本科目第4回目、つまり“自然”との関わりに関しての授業内容1回目は、教科書を参考に、子どもの「自然」との関りを支えるために保育で大切にすべきことや留意すべきことを解説した。その内容は以下のとおりである。

- ①時間、空間を保障する
- ②(自然に)関わる自由を保障する
- ③子どもが感じたことを受け止める
- ④多様な自然と出会う機会を保障する
- ⑤(自然との)関りを深める援助をする
- ⑥多様性を大事にする
- ⑦(子どもが)自分のこととして考える経験となるようにする
- ⑧自然との関わりを支える保育の指導案作成にあたっての留意点

この授業の中では、次の3点を重視している。1点目は、子どもの些細な姿を大切にすることである。子どもが主体的に身近な環境に関わり、自分なりに感じたり考えたり試したりなどできるような支え、その姿を受け止めるようにと伝えている。その際、教科書の本文中に記述された保育の様子や、エピソードとして掲載されたものを大いに活用した。時間が許す限り音読の時間を取り、授業者も解説を入れ、学生が保育をイメージしやすいようにした。例えば、次のような教科書の記述部分である。

・・・ 子どもたちは、思いのままに身の周りの自然とかかわっていきますが。継続してかわったり、それらをうまく利用して遊んだり、さらに試したりするためには、アイデアや道具が必要なこともあります。例えば、野の花を摘んで集めることは、子どもたちはすぐにでも行えますが、ちょっとした包装紙やりぼんがあると花束になります。・・・

学生も幼少期には上記のような遊びを経験しているであろう。教科書を丁寧に読むことで、学生は幼少期のことを思い出し、「楽しい」「不思議だ」「きれい」「怖い」「気持ち悪い」など、その時感じた自然に対する気持ちも改めて思い起こすと思われる。このことが、大人になった学生たちの自然に対する関心を、再び高めるきっかけになるのではないかと期待している。そして、保育で求められている、「自然」との関わりを豊かにするということは、特別に何か大掛かりな保育をすることではなく、何気ない日常の、身近な昆虫や動植物などとの些細な関りを大切にすることであることにも気付くのではないかと考えている。

2点目は、安全に関してである。自然との関わりの中では、怪我をしたり危険に遭遇したりすることが考えられる。子どもの自然との関わりを保障し、豊かな経験が積み重ねられるようにするためには、身近な自然が子どもにとって安全かどうかの知識を、保育者が最低限身に付けておく必要がある。そこで、授業では、毒性や危険性がある

身近な動植物を紹介し、保育で注意すべきことに触れるようにしている。

また、「リスク」と「ハザード」の考え方も伝えている。リスクは、遊びの楽しみの要素で、冒険や挑戦の対象となる。子どもは、遊びの中で小さなリスクへの対応を学ぶことで、経験的に危険を予測し事故を回避できるようになる。よって、保育者は、「リスク」を適切に見守る態度が必要となる。一方ハザードは、事故を発生させる恐れのある危険性であり、保育では取り除くべきである。授業では、この考え方を強調し、学生が保育者となった際、子どもの自然との自由な関わりを保障して、安全に、豊かな体験を積み重ねられる実践を行うよう伝えている。

3点目は、命についてである。保育の中での命あるものとの関わりは、保育者を悩ませやすいものであろう。というのも、乳幼児期は、発達の自己中心的な段階であり、対象である生き物に自分勝手な扱い方で接し、死なせてしまうなどすることが多いからである。しかし、子どもが命あるものに関わる機会を奪ってしまえば、命の大切さ、はかなさ、畏敬の念などを感じる経験を遠ざけてしまうことになる。領域「環境」の内容(5)に、「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」とある。ニワトリやウサギ、金魚などの飼育動物、ダンゴムシやバッタなどの身近な生き物に直接触れて遊び、えさを与えるなどの世話をし、また草花を育てるなどの機会を大いに取り入れることが大切である。関わる中では、命あるものを、まるで単なる物を扱うように接したり、不注意で命を落とさせてしまったりということも当然起こるであろう。そのような時こそ、子どもが命について考え、様々な生き物のことを自分のこととして考えながら豊かな体験を積み重ねられるよう、保育者が丁寧にしかかわることが重要であると考えられる。命の大切さを子どもに伝えることは難しいことであるが、保育の中で子どもの発達段階に応じ、丁寧に取り扱ってほしいと考えている。

## 2.2.2 第5回の授業について

先述のように、幼稚園教育要領解説には、「・・・どのような樹木を植えておくかといった園内の環境から、保育室内でどのような生き物を育てるのかといった環境の工夫が必要になる。」と記載してある。子どもの自然との関わりを深めるためには、室内外を含め、園内の自然環境を把握し、子どもがいつどこでどのような自然とどのようにかかわることができるのか理解しておいたり模索したりしておくことが重要であると思われる。そこで、第5回目の授業では、身近な自然環境を探索して自然環境マップを作成する取り組みを取り入れた。

身近な環境への興味・関心が薄い傾向にある学生が周囲の環境に目を向ける経験を積めるように、そして、実際の保育現場を視察して、保育現場の工夫している点や自然環境に対する考えに触れる機会にしたいと考え、本学キャンパスと、隣接する本学附属幼稚園の園庭を実際に散策することにした。

### 2.2.2.1 学内・附属幼稚園散策の方法及び学生の様子

散策する際、3～4名のグループで回るようにした。一人では気付けないことでも、グループであれば誰かが何か気付く、情報を共有できると考えたからである。また、編成については授業者が機械的に行い、これまで関りの薄かったクラスメイトともしっかりかかわる機会となるようにした。

学内と附属幼稚園を合わせた平面図（資料1）をA3用紙に印刷して学生一人ひとりに配布し、植栽や地面の状態、見かけた生き物、予想される季節による変化、学生自身の気付きや考えなどを自由に書き込み「自然環境マップ」を作成するよう指示した。

散策中の学生の様子には個人差が見られた。周囲を見回しながら足早に進み、特に記載するようなこと（もの）はないと言う者がいれば、数歩進んでは足を止め、“この草は子どもの時にままごとに使っていた”と、幼少時を思い出したり“な

にこれ。ドングリ？ちっちゃすぎ！”と気付きを言葉にしたりして、積極的に自然に目を向ける者もいた。

散策時の学生の傾向として、2点特徴が見られた。まず、ほとんどの学生が自然物（今回は特に植物）の名前を特定しようとしていたことである。関心のある植物を見つけると、すぐに授業者に名前を尋ねてきた。そこで授業者は、尋ねられたすべての質問に答えることは避け、もちろん、授業者もわからないものがあつたこともあり、スマートフォンで写真を撮って後で調べるよう促すなどした。学生によっては検索アプリを使用する様子も見られたが、アプリが提示した候補数が多く、結局特定はできないものも多かった。このような学生に対し、授業者は改めて保育で大切にすべきことを伝えるように働きかけた。保育は、子どもが知識や技能を身に付けることが目的ではなく、興味・関心のあることに主体的に関わることが重要であることだ。つまり、知らないことに対し、好奇心や探求心を働かせて自分なりに調べたり特徴を把握したりすることを積み重ね、懸命に目標に向って前に進むことを子どもに示すよう伝えた。ただ、保育者は、探求する姿を子どもに示すことに加え、陰ではしっかり知識を得る努力が必要である。そのため、必ず図鑑等で調べて自然環境マップに記載するよう促した。

学生の傾向の2点目は、見立てることができるという点である。クスの実が落ちていところを通った際、「ブドウだ！」と声を上げ、何粒も拾っているグループがあつた。その際、緑色の実を“シャインマスカット”、黒く色づいたものを“巨峰”などと言い楽しんでた。子どもは、身近にあるものを自分のイメージする遊びに合わせて見立てて遊ぶことが多い。例えば戸外でのままごとで、アジサイやカンナなどの大きな葉を皿に見立てて泥団子を乗せることがある。小さな葉をお金に見立てて、お店屋さんごっこ売り買いを楽しむ姿もある。そのような遊びの中での子どもの見立てを「本物じゃない」「違うでしょ」と否定しては、子どもの想像力を摘んでしまうことになりかねない。よって、保育者は、子どもの見立てを

受け入れ、子どもとイメージを共有して楽しむことが重要である。そのため、自然物を遊びに応じて見立てることができる力は大切にしてほしいと考え、学生が見立てている場面を認め、子どもの目線に立って周囲の自然物を捉えていくことを勧めるようにした。

#### 2.2.2.2. 授業者からの積極的な関り

授業者が、学生に関わりを持ってほしいと考えているものであっても、学生の主体性に任せておくと素通りされてしまうものも多い。そこで、2種類の植物と、1つの場所に関しては、授業者から積極的提示し、学生の関心を集めるようにした。植物の1つ目は「イヌザンショウ」である。食用ではないが、葉に傷を付けたら撫でるように触れたりするとサンショウの香りがする。本学の職員駐車場周辺に多く自生しているため学生に紹介し、触覚や嗅覚を使っての関わりを楽しめるようにした。また、アゲハチョウの幼虫の餌にもなるため、時々幼虫がいたり、葉の裏にアゲハチョウの卵があったりする。散策時は残念ながら見つけられなかったが、チョウの種類によって食する植物が異なり、それを利用することでチョウを呼び寄せる花壇も作ることができるなど、自然との関わりを広げる方法の提案も行った。

2つ目の植物は「ヨウシュヤマゴボウ」である。これも、本学の職員駐車場に自生している。濃い紫の実をブドウのように付けるのに、名前は「ゴボウ」とつくのがおかしいと学生がつぶやいていた。この実はきれいな赤紫色の汁を出し、色水遊びで使用することも多い。実際この時も、授業者がビニール袋に50ml程度の水を入れて用意しておき、ヨウシュヤマゴボウの実を一つ入れて、学生の前で揉んで見せた。すぐに美しい色水ができ、学生からは歓声が上がった。学生からは「やってみよう」という声が上がった。しかし、ここで授業者が学生に伝えたいことは、「ヨウシュヤマゴボウ」の実には毒があるということだ。そのため、決して実を口にはいけなことを伝えた。こうして、様々な植物がどのような特徴を持っているのか、どのような危険が潜んでいるのかを学生

が知識として得ることで、保育がより安全で豊かなものになると考える。

もう一点、授業者が積極的に学生に提示したい場所が、「イヌザンショウ」「ヨウシュヤマゴボウ」が自生する職員用の駐車場である。この場所は山を切り拓いて作った駐車場であり、周囲は竹林や雑木林となっている。そのため、多様な動植物が出現する。短期大学の駐車場であるため実際にここに子どもを連れて来て遊ぶことはない。しかし、保育においては、「遠足」として近隣の山や茂みに出かけることもあるだろう。その際、その場所にどのような危険が潜んでいるのか、それは回避することができるのかなどを事前に調査することが重要であることを学生に伝えたい。子どもが活動する周辺の自然環境にも注意を向け、子どもが安心して存分に自然と向き合うことのできる場を用意できる保育者になってほしいと考える。

#### 2.2.2.3 学内・附属幼稚園の自然環境マップ

学内と附属幼稚園の散策を約1時間行い、その後は教室でグループごとに意見交換をして、各自自然環境マップを作成する時間を取った。授業時間内で仕上げることができない、また、詳しく記述したいといった学生には、締め切り日を数日後に設けて提出させた。

作成した自然環境マップは、図1のように、学生が散策途中で発見した植物や生き物を書き込むものもあれば、図2のように発見した動植物に加え、そこで予想される活動（遊び）や危険、また



図1 自然環境マップ①  
(発見した動植物を絵で書き込んだもの)

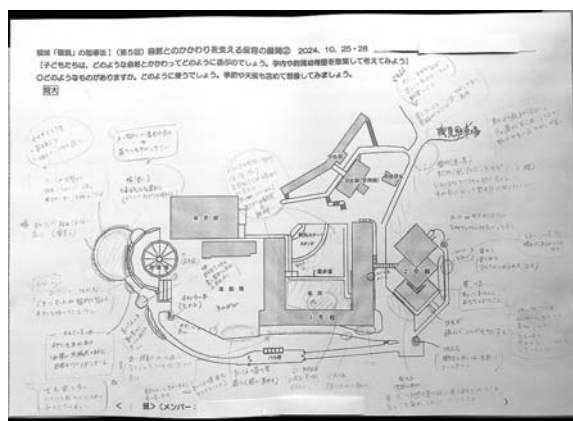


図2 自然環境マップ②  
(発見、気づき、遊びの予想等様々書き込んだもの)

季節による変化なども書き加えているものもあった。第4回の授業で話した「リスク」と「ハザード」の考え方で捉えたものもあり、授業者が意識して伝えたことが理解できていると感じられた。また、散策途中で見立てたものを、「～みたい！」と友達の発した言葉でメモしているものもあり、学生なりに、保育者目線と子ども目線で気付いたこと、印象に残ったことを書き込んでいることが伝わった。

#### 2.2.2.4 授業後の学生の感想

学生の自然への興味・関心を高めることを目指した自然環境マップ作成の授業について、学生の感想を記述式で求めた。代表的な感想を以下に記す。

- ・今回の探索で幼かったころを思い出し、グループのメンバーと楽しみながら調べた。(中略) 自然を見て触れ合うことは、心が和やかになることが分かった。また、自分たちの視点と子どもたちの視点は異なるため、如何に子どもたちと共感し分かり合えるかを考えていきたい。
- ・葉っぱが丸くなっているのもなぜだろうと疑問を持ったので、子どもたちも疑問を持った時一緒に考えたり答えたりできるよう調べておきたい。
- ・季節外れの桜やタンポポ、シロツメクサが咲いていました。彼岸花の枯れたものが干からびたピーマンに似ていました。幼児は自分なりの視

点で見つけたものや感じたことを伝えてくると思うので、しっかり拾うことも大切になるのではないかと思います。(中略) 園の付近やよく行く場所にはどのような植物や虫がいるのか、どんな特質なのか知っておけば、子どもたちを危険から守ることに繋がるのではないかと思います。

- ・保育者が季節の花や生き物を把握しておくことで、子どもの(自然への)興味・関心につながれると思いました。
- ・今まで気にしてこなかった身の周りの植物を観察してみると、数えきれないほど多くの種類の植物があることに気付くことができた。実のある植物は、集めるだけでも楽しいし、つぶしてみたり、ごっこ遊びに活用出来たり、いろいろな遊びができると思った。
- ・花などは、季節によって違った花が咲いたり、木の実や葉っぱが生えたり、1年を通してたくさん変化していくため、特に子どもたちは、興味や関心を持ちやすくなるのではないかと感じました。実や葉っぱ、花を遊びに活用することで、子どもの探求心や好奇心はより高まっていくと思われました。
- ・このようなマップを作って、季節ごとに楽しめる環境を把握することはとても大事と思いました。
- ・散策をすると、子どもたちが興味を持ちそうな自然がたくさんあった。しかし、ヨウシュヤマゴボウなど危険なものも身近にある。保育者が植物や生き物の危険について勉強し、子どもたちに分かりやすく教えることが大切だと感じた。
- ・木をよく見ると、一つずつなってる実がそれぞれ違うことが分かりました。(中略) 葉の形や木の太さなど一つ一つ違って面白かったです。小さい頃に戻った気分で楽しかったです。子どもは小さなことでも興味を持って遊んだりするので、私も同じようになんにでも興味・関心を持って生活したいです。
- ・短大の庭園には、春夏で見ていた紫色の藤棚が、今回見た時、豆みたいなものになっていて、こうやって成長し、また春に紫のきれいな花を咲

かせていくのかなと思いました。季節によって新しい発見ができてよかったです。これからも周りを見て新しい発見をしていこうと思いました。

- ・植物だけでなく昆虫も子どもが関心を持つ自然環境である。ずっとその場所にいるわけではないため、時間帯や季節によってみることのできる虫は変わってくると思った。
- ・自然遊びには決められたルールがないため、子どもたち自ら「どうやって遊ぼう？」と考えることになるので、想像力や発想力が育まれていくと思いました。私が保育者になったら、身近に自然と触れ合える環境を作っていきたいです。
- ・附属幼稚園の遊具の側の芝生が柔らかかったため、子どものけが防止や安全面に配慮しているのではないかと感じました。

学生の感想から、学内・附属幼稚園の散策は、様々な自然に気付く良い機会となったこと、楽しさやなつかしさ、面白さなどを感じるよい時間となったことが分かった。また、第4回の授業内容を踏まえながら散策を行っており、保育者の視点で自然環境を見つめていることも伝わった。そして、如何に身近な自然環境が豊かであり、自身が日頃から関心を持つことが大切であると気づいている学生が多かった。このことから、2回にわたる自然とのかかわりを支える保育についての授業は、授業者が求める効果があったように感じている。今後は、この授業で終わりにするのではなく、日ごろから授業者も学生と身近な自然について気付きを伝え合ったり、生活内で自然と触れ合ったエピソードを話したりして、自然に対する意識が途切れないようにかかわりたいと思う。

### 3 課 題

今回、学生が身近な自然環境に一層興味・関心を持つことができるよう、実際に学内と附属幼稚園の散策を行った。約1時間の散策時間ということで、全体を散策することは難しかったと思われる。一方、全体を回った学生にとっては、じっくりと自然に関わる時間が取れなかったと思われる。

このことから、散策の範囲や学生に学び取ってほしい内容を精選し、それに応じた授業時間の確保が必要であるのではないかと考える。

また、現時点では、授業直後の学生の感想から授業内容の検証を行ったが、年度末には“授業評価アンケート”が科目ごとになされる。その結果も踏まえながら、学生の授業に対する満足度を確認し、授業内容の検証及び改善を図ることも大切であると考えている。

### 4 おわりに

学生が、子どもの自然との関わりを豊かに支えることのできる保育者となるべく、学生自身が身近な自然環境に興味・関心を持つことができるよう、「領域『環境』の指導法Ⅰ」の授業の取り組みの工夫及び見直し・検証を行った。学内と附属幼稚園園庭の散策を行うことで、日ごろの生活では目を向けることのない身近な自然に対し、学生なりに新しい気付きを見出したり、幼少時の体験を思い出したりと、自然と関わる楽しさや面白さを感じられたようである。また、事前の授業で学んだ自然の恐ろしさや危険性も意識しながら、保育者の目線で身近な環境を見ることも経験できた。保育は環境を通して行うことが基本であり、特に、自然環境は子どもの健全な成長に大きな影響を与えるものとして重要視している。保育施設によって身近な自然環境が豊かな園もあれば、大いに工夫しなければならない園もある。どのような園であっても、学生一人ひとりが、保育者として身近な自然環境の大切さを理解したうえで、子どもにとって有意義な環境を用意することができるようになってほしいと願っている。そのためにも、本科目の目標を授業者が再確認し、目の前の学生の状況を理解したうえで、学生が主体的に学びを広げたり深めたりできるような授業を作りたいと考える。

#### 参考・引用文献

- ・文部科学省 幼稚園教育要領 2017年度改訂版
- ・文部科学省 幼稚園教育要領解説 平成30年
- ・『新しい保育講座9 保育内容「環境」』  
久保健太・高嶋景子・宮里暁美編著 ミネルヴァ書房

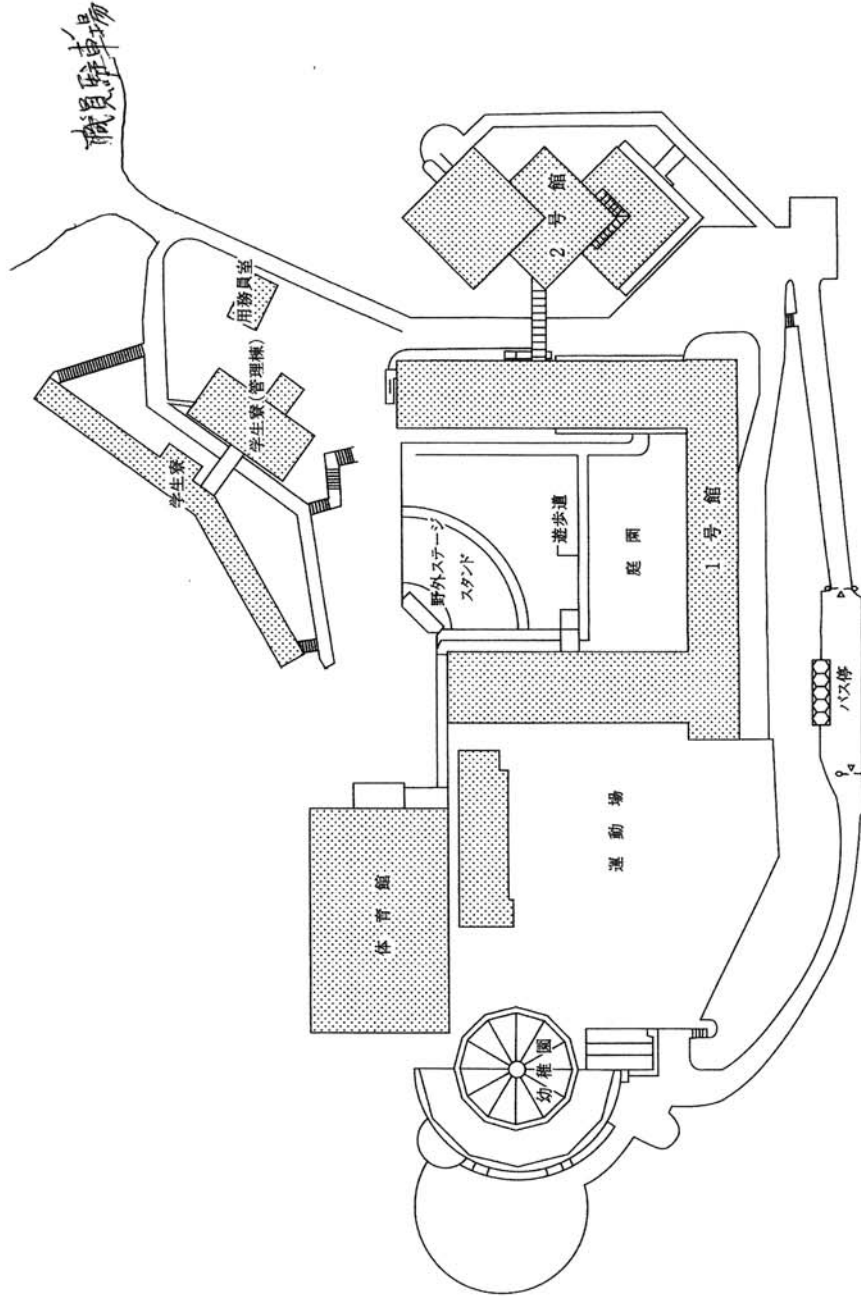
2021

- ・松尾公則「『子どもと自然環境』という卒研ゼミでできること」『長崎女子短期大学紀要第45号』2020 p 62-71

<資料1>

領域「環境」の指導法Ⅰ（第5回）自然とのかかわりを支える保育の展開② 2024. 10. 25・28 番号 氏名

[子どもたちは、どのような自然とかわかってどのように遊ぶのでしょうか。学内や附属幼稚園を散策して考えてみよう]  
○どのようなものがありますか。どのように使うのでしょうか。季節や天候も含めて想像してみましょう。



< 班> (メンバー: )